

# 留学事始め、そして今

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文

明治三八年に開学し、翌年愛知県初の私立高等女学校として認可された愛知淑徳高等女学校の教育方針を、創立者

小林清作先生は「日本主義を以て淑徳を涵養する」としました。その一方で、当時の『高等女学校施行規則』では、英語などの外国語は「コレラ欠キ又ハ随意科目トナスコトヲ得」とされているにもかかわらず、英語を必須科目として重要視しました。これには「女子に英語は要らぬ。英語を学ぶ力で、日常生活に関係のある学科を



国際会議に出発する校長を見送る教職員・生徒

学んだ方がよい」との反対意見が多く寄せられ、創立者は『女子と英語』で次のように弁明をしました。

成程今日の生活の状態から見ましたならば、女子に英語は左程必要でないかも知れませぬ。併し今日学問して居る女子は、今日の為に学問して居るのではありませぬ。将来の為に学問して居るのであります…吾輩は常に思ふ。教育家は現在に執着してはならぬ…時勢の趨向を察せず、其の日暮らしの考で、教育を施したならば、恐らく人の子を書くことがあるで有りませう。

（明治三九年「淑徳」）

淑徳生は明治の時代から英語を学んでいましたが、女学生の西欧への留学は戦前では夢のまた夢。西欧に渡航した淑徳生は、昭和九年、第四回世界女子オリムピックで日本代表選出され、ロンドンに渡り、陸上八〇〇m決勝で日本記録により六位入賞した井戸田きよ子さんだけでした。

\*

英語は敵国語として一切禁止され、英語教師は珠算などを教えていた戦争の時代が終わり、戦後の新しい教育が始まります。

最初の愛知淑徳の国際交流は、昭和三年、校舎が池下から星が丘に移転した時に造られたプールがきっかけとなりました。

新築された五〇mプールは当時珍しく、昭和三六年、日米水泳競技大会が名古屋の振甫プールで開かれたその前日、淑徳のプールで米国選手の練習が行われました。その時、付き添っていた口サンゼルスにあるパリセーズ高校の教師からの「淑徳のような学校と姉妹校の関係をもちたい」との申し出を受け入れ、両校生徒の作品の交換など、初の国際交流が始まったのです。

昭和三八年、小林素三郎校長が世界教育者団体総連合に私学代表として本校を出発した時には、全校生徒が拍手で見送り（写真）各種壮行会が名古屋だけでなく東京でも催されるほどでした。一ドル三六〇円時代、西欧への渡航や

留学はまだまだ憧れでした。

グローバル化が進み、現在愛知淑徳大学では四八校に及ぶ海外協定校と留学プログラムがあり、英語で授業を行う学部もあります。

\*

グローバル化の進展は、「地球市民」としての一体感が高まる一方で、政治体制、民族、宗教の違いによる摩擦や対立も生まれがちになります。また、インターネットの普及により、世界中の情報がいつでもどこでも得られる便利な社会となった一方で、居心地のよい情報だけに安住する「内向き」の傾向も示されるようになりました。

今は海外に行くことが夢のまた夢でも憧れでもありませんが、若者が異文化に身を置き、異文化を実体験することで、それぞれの違いを認め合い共に生きる地球市民に育っていくことが、より一層求められる時代と言えましょう。「鯛もヒラメも食うた者が知る」留学にはバーチャルリアリティでは味わえない良さがあるのです。